絶望

徳田秋聲

青空文庫

『オイ〳〵何處へ行くんだよ。』

とお大と云ふ裏町のお師匠さんが、柳町の或寄席の前の汚い床屋から往來へ聲をかける。

聲をかけられたのは、三人連の女である。孰も縞か無地かの吾妻に、紺か澁蛇の目かの傘を翳して、飾し込んであるが、聲には氣もつかず、何やら笑ひさゞめきながら通過ぎやうとする。

『オイ〳〵、素通は不可いよ。』とお大は一段聲を張あげて憤れつたさうに、

『此にお大さんが控えて居るんだよ、莫迦野郎唯は通しやしないよ。』

三人のうちで、一番丈の高いお山と云ふ女が偶と振顧くと、『可厭だよ。誰かと思つたらお大なんだよ。』と苦笑しながら罰が悪いと言ふ體で顏を見る。

『フン、また芝居だろ。』とお大は赭顏に血走つたやうな目容をして、『好い年をして好い氣だね。』

お山と云ふのは、もう三十四五の年増である。お大の姉で、此も常磐津のお師匠さんなのだ。亭主が此場末の不景氣な床屋で、宅には小供が三人まであるが、其等は一切人の好い亭主に敲つけておいて、年中近所の放蕩子息や、若い浮氣娘と一緒になつて、芝居の總見や、寄席入りに、浮々と日を送り、大師詣とか、穴守稻荷とか、乃至は淺草の花屋敷とか、團子坂の菊とか云ふと、眞先に飛出して騷る。

一二年前までは、妹のお大を臺所働やら、子供の守やら、時偶代稽古などにも使つて、頤で追　してゐたものが、今では妹の方が強くなり、町内の二三の若者が同情して後楯になつてくれたのを幸ひ、姉と大喧嘩をして、其まゝ別れ、別に一世帶構へることになつた。其以來二人は前世の敵か何ぞのやうに仲が惡い。

お山は二歩三歩進寄つて、『何だよ大きな聲で……芝居に行かうと、何に行かうと餘計なお世話ぢやないか。お前に不義理な借金を爲てありやしまいし。』と言つて奥を窺込むと、丁度凸凹なりの姿見の前で、職工風の一人の男の頭にバリカンをかけてゐる、頭髪のモヂヤ〳〵した貧相な此の親方に、『今日は。』と挨拶する。

親方はガリ〳〵遣りながら、『よく降るぢやござんせんか。今日は本郷座ですね。』『ハア、今日はお義理でね。眞實に方々引張られるんで、遣切れやしない。今日あたり宅に寐轉んでる方が、いくら可いか知れやしない。』

『巧く言つてるよ。』とお大は嫣然ともしない。

床屋はちよい〳〵お山の顔を見ながら『お山さんは、何時でも引張凧だからね。』『誰が引張るもんか。』とお大は相變らず喧嘩腰で、焦燥しながら『子供に襤褸を着せておいちや、年中役者騒ぎをしてゐるんぢやないか。亭主こそ好い面の皮だ。』

『何だね此人は。然云ふお前は何だえ。』とお山は憎さげにお大の顔を見詰めて、『今日は酒にでも醉つてるんぢやないかい。可厭に人に突かゝるぢやないか。アゝ解つた、お前此頃松公

に逃を打たれたと云ふから、其で其様なに自棄糞になつてるんだね。道理で目の色が變だと思つた。オヽ物騒々々！』

　床屋は『ウフヽ』と氣味の惡い笑方をする。

『大きにお世話だよ。』とお大は憤々して、『お氣毒さまだが、松公は此方が見切をつけて縁を切つたんだよ。如彼ひよつとこの一人や二人、欲しけりや何時でも貴方に上げますよ。』

『チヨツ莫迦にしてるよ。松公はもと〳〵此方の弟子ぢやないか。其をお前が引張込んで、散々ツぱら巫山戯た眞似をして置いて……』と未だ何か毒づかうとしたが、急に周圍に氣がつくと、低聲になつて、『風が惡いよお前は……。』

　お大は急に行詰つて、『アヽ何とでも言ふが可い。私が風が惡いんだよ。』

『其にお前、昨夜も宵の口にお前の宅の前を通つたら、直り戸を締めて、隣の洗濯屋の婆さんに聞いたら、其前の晩から歸らないつて言つてたよ。肝腎の稼業のお稽古もしないで、色情のついた犬みたやうに、一體何處を彷徨いて歩いてゐるんだよ。』

　床屋は又ウフヽと笑ふ。

『お大さん、何だか風向が惡いね。』

『何を言つてやがるんだよ。』とお大は血走つたやうな目で床屋を睨つけ、肉と血とで脹らんだ頬を愈よ脹ましたが、『何とでも言ふが可いよ。口は重寶なものさ。』ともう焦燥して口が利けず、口惜しさうに姉の顔を見詰めてゐる。

『それに其風は何だよ。』とお山は言ふだけの事は云つてやると云ふ風で、『お前着物を如何お爲なんだよ。此寒いのに、ベラ〳〵した袷かなんかで。其様な姿で此邊を彷徨しておくれでないよ、眞實に外聞が悪いから。』

『フン、孰が外聞が悪いんだらう。私や十歳の時から姉さんの御奉公してゐたんだよ。其で姉さんの手から、半襟一懸くれたこともありやしないで。チヨツ利いた風な事を言つてるよ。』

『其は、お前が、腕もありもしない癖に、妙に私に楯つくぢやないか。だから、私が、もう少し辛抱お爲つて言つてるのに、お前が何でも彼でも一本立でやつて見せますつてんで……。』

『アヽ姉さんとこに一生お饌どんをして居たら可いでせうけれどね……。』

お山は些と時計を覗いて、『オヤもう四時だよ。お大、人を呼込んでおいて、用事は其限かい。又宅を明けてあるんだらうから、日の暮れないうち、早くお歸り。』とお山は言棄てて、コートの裾を※げながら、ゴタ〳〵した秋雨の町を菊坂の方へ急いでゆく。

お大は後で少時姉の悪口を言つてゐたが、此も日の暮に店を出て行く。

狭い柳町の通は、造兵歸の職工で、※くり返るやうである。軒燈が徐々雨の中から光出して、暖かい煙の這出して來る飯屋の繩暖簾の前には、腕車が幾臺となく置いてある。お大は何處かの番傘を翳して、ブヨ〳〵した横肥の體を、町の片側からノソ〳〵と歩いてゐる。

お大は姉と違つて、幼い時分から苦勞性の女であつたが、糸道にかけては餘程鈍い方で、姉も毎日手古摺つて居た。其癖負けぬ氣の氣象で、加之喧嘩が好と來て居る。何か知ら始終不平

を持つてゐる女で、其狹い額を見ても、曇然した目のうちを見ても、何處か一癖ありさうな顏構である。

別れて出たては至極穩かで、白山あたりから通つて來る、或大工と懇意になつて、其大工が始終長火鉢の傍に頑張つてゐた。朝から酒を飮み、日の暮れぬうちから寢込んで、二人とも夢中になつてゐたもので、少しばかり附いた弟子も、不殘見限つて離れてしまひ、肩を入れた近所の若い者も、直り足を絶つて了つた。がお大は一向平氣で居た。

すると、此夏頃から、松公といふ、色白の若い蕎麥屋の出前を口說落して、金（大工の名）の目を忍んで、チヨイ〳〵宅へ引張込むやうになつた。松公は無論本氣ではなかつたらしいが、女が容易に放さぬので、可厭々々ながらも自由になつてゐた。其事が何時か薄々金の耳へ入つた。金の足は、何時かバツタリ絶えてしまふ。

其樣な心算ではなかつたから、お大は繁々金へ呼出をかける。第一大切の米櫃を亡して了つては、此先生活の道がないので、見かけによらぬ氣の小いお大は、氣が氣でない。が金は其り涕汁も引かけない。處へ松公は段々お大が鼻について、始終氣のない素振を見せる。お大の荒み出した感情は益す荒むばかりだ。

松公は此四五日、姿も見せない。お大は頭腦も體も燃えるやうなので、宅に熟としてゐる瀨はなく、毎日ぶら〳〵と其處ら中彷徨きまはつて、妄濫と行逢ふ人に突かゝつて喧嘩を吹かけて居る。

丸山の下の横丁まで來ると、其角を曲る出前持の松公に逢つた。松公は蕎麥の出前を、ウンと肩の上へ積上げて、片手に傘を翳して居たが、女の姿を見て見ぬ振をして行過ぎやうとする。

『ずるいよお前さんは……。』とお大は叫びながら、轉げさうに寄つて來て、

『此人は眞實に薄情だよ。』と掴みかゝりさうにする。

男はヒヨイと立停つて、ニヤ〳〵笑ひながら、『何をするんだ、危えな。』

『危えも糞もあつたものか。サア此から私の宅までお出で。來なけや引張つて行つてやるから。』

『笑談ぢやない。用があるなら、後で行くから……え。眞實だ。急ぎなんだから、勘辨しておくんねえ。』

『そんなら私が從いて行つたつて可いだらう。そして歸に引張つて行くから。』

『其樣なに爲なくたつて、逃げも隱れもしやしねえ。』と松公は何處迄も素直に出て、『眞實に惡かつたよ。だけど、二三日體が惡くて、店へも出なかつたんだから、爲方がねえぢやねえか。』

『嘘をお吐きでないよ。』

『嘘なもんか。實際だよ。』と松公は獨で笑つて、『第一己は金さんに濟まないと云ふ、其も有るからね。が、孰にしても行く。今夜必然行く。』と胡散くさい目色をして、女を見下す。

『當になるものか。』と女は鼻で笑つて、『お前さんの口前の巧いにも憫れるよ。』

『アレ、彼様なことを言つてら。ぢや好いや。然う思つてるが可いや。』
『莫迦にしてるよ。』と女は※然になつて、『お大姐さんを瞞して見やがれ、唯は置かねえから。』
松公は相渝らずニヤ〳〵してゐたが、此女の毒口にかゝつては、堪らぬことを知つてゐるので、
『アヽ好いよ、好いつてことよ。だが遅くなつたら、行かないかも知れねえよ。』
『まさか、一時二時まで出前がありやしまいし。加之此頃は夜が長いよ。』
『眞實だ。』と松公は呟きながら、通を突切つてしまふ。
『畜生！』とお大は無上に胸が焦燥して、『莫迦にしてら』と突拍子な聲を出しながら、スタ〳〵歩出す。
細い路次を通つて、宅の前まで來ると、表の戸は一昨日締めて行つたまゝである。何處をほつき　つてゐたのか宛然夢中で、自分にも明瞭覺がない。が、今は淺草に住つてゐる友達と、一昨日一日公園をぶら〳〵遊んで、其晩其處で泊つたことは確である。昨日は一日、芝で古道具屋をしてゐる叔母の處へ行つて、散々ツぱら姉の棚卸しや、自分の自惚やら愚痴やら並べて、其晩寄席へ連出したことも確である。今日は日比谷の散歩やら、芝居の立見やら、滿らなく日を暮して、お終に床屋へ入込んで今まで油を賣つてゐたのであるが、氣がついて見ると、腹はもう噛つくやうに減つてゐる。

戸をあけて宅へ入らうとすると、闇の中から、哀な細い啼聲を立てゝ、雨にビシヨ〳〵濡れた飼猫の三毛が連に人可懐さうに絡つて來る。

お大はハツと思つたが、小煩くなつて、

『チヨツ煩い畜生だね。いくら啼いたつて、もう宅にや米なんざ一粒だつて有りやしないよ。お前よりか、此方が餘程餓いや。』と呶鳴りながら、火鉢と三味線の外、何にもない上へ上つて行く。

で、手撈りに、火鉢の抽斗からマツチを取出すと、手捷く摺つけて、一昨日投出して行つたまゝのランプを、臺所の口から持つて來て、火を點けたが、もう何をする勇氣もなく、取放しの蒲團の上に、疲れた重い體をヅシンと投出したと思ふと、憤れつたさうに泣いて居た。

三毛は暫く其處らをウソ〳〵彷徨うてゐたが、旋て絶望したのか、降連る雨のなかを、悲しげな泣聲が次第に遠くへ消えて行つた。

青空文庫情報

底本：「明治文學全集68　徳田秋聲集」筑摩書房
　　1971（昭和46）年
入力：網迫
校正：渡瀬淳志
1999年2月12日公開
2006年1月6日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

絶望

徳田秋聲

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/